

~ 13
3111
4





義小説打出演巻之四

南里亭其樂著

第十三回

時雨の大意

人の善悪不獨獨の應報を天より命どろと一ども人定り附ハ
 天小勝。天もまこと命を下さるの運速あり見よ菴系ねを
 悪逆直井正を父子を誅く國遠く途中お海門悪頂と殺害
 一打る後月の銀ふりり付濃筋り足を止め人小作と結とれ
 一も出定りとせぬ孫ふ恩人謀三を子あけ系馬の一卷を
 奪い去退不知案内のそらを夜行れく遊走り時境方小
 ぬき一村ふ去あり近づく何程あると肉をれば掛巻を以て

とつては乃法極中一是あ人維いつの内こそ終登川を
中新あり破乃城下へを徑道一とすおとを以曉るより
何より以てあろ中と一破とす中ハ観音寺のりある下
と定こくを乗一尋ね城下をさして急ぎ一林極
履お付て細術修行の浪人彼へ守公係系り一りの古推奉
守るこり入る武林氏ハ近ハ國中おわさ武術師範の系
あり一ゆ先入事一を詳し尋ね終て對面一人相
格好足終てお足下ハ武術修行の者と信らるが流系
河流しては姓名一ゆと問たれば答て某東國駿河小育一が元來
近ハ湖西比良の産一して義經の流を慕い自稱して騎馬流と

細術を修へむを流お終てハ奥系を極めハ父祖ハ彼ハ末流ハ
本の一旗那本の正統して某お身ま人ありゆハ家を譲り某
ハ武士の骨を立幼奉の砌國を立退来玉り生互比良回松龜軒と
名系兼く守公の屋ハ一夫同トくハ中臣の君お仕ハ誠忠と竭
一立身して先祖を無一お家の面目同流の定も必も人
りと心をそ一習練終ハ取ハ師の弟子ともか一
ては有ハ披巻下さ一ばせ一世ハ之恩忘れやま一と一向
一ゆハ林臺右邊つ字終て一ゆハ心初目野と本の
正統とあればお家の連枝守公と守玉ハトとて守兼がこは系
一ゆハ丹練して一流も互互ハの上ハ

主退のひーが足牙も小実解ある者にて悪くしてゐる
 も少座ふくこと中上なるゆへに一諸役人一通ト別祿二百石
 して細祿昨花小石かくられ系家老中一給くまれり
 林巻在唐つも不思議の縁ともり比良田を推奉せし下子そ
 出意小叶い出抱下されし由一武士の面目も難き事ありと
 懐びをのぞる小ね童形も一林氏の出意小依てたぢの出抱
 小ぬしつり出後云々小ぬしつり一以上吾作も叙し中
 くるつ牙とも思し台万り出若下されしと退従しと
 是より林と云二の悪意もゆり倭弁をもて諸役人入つ牙も
 今かろくお急の書しをふしぬ

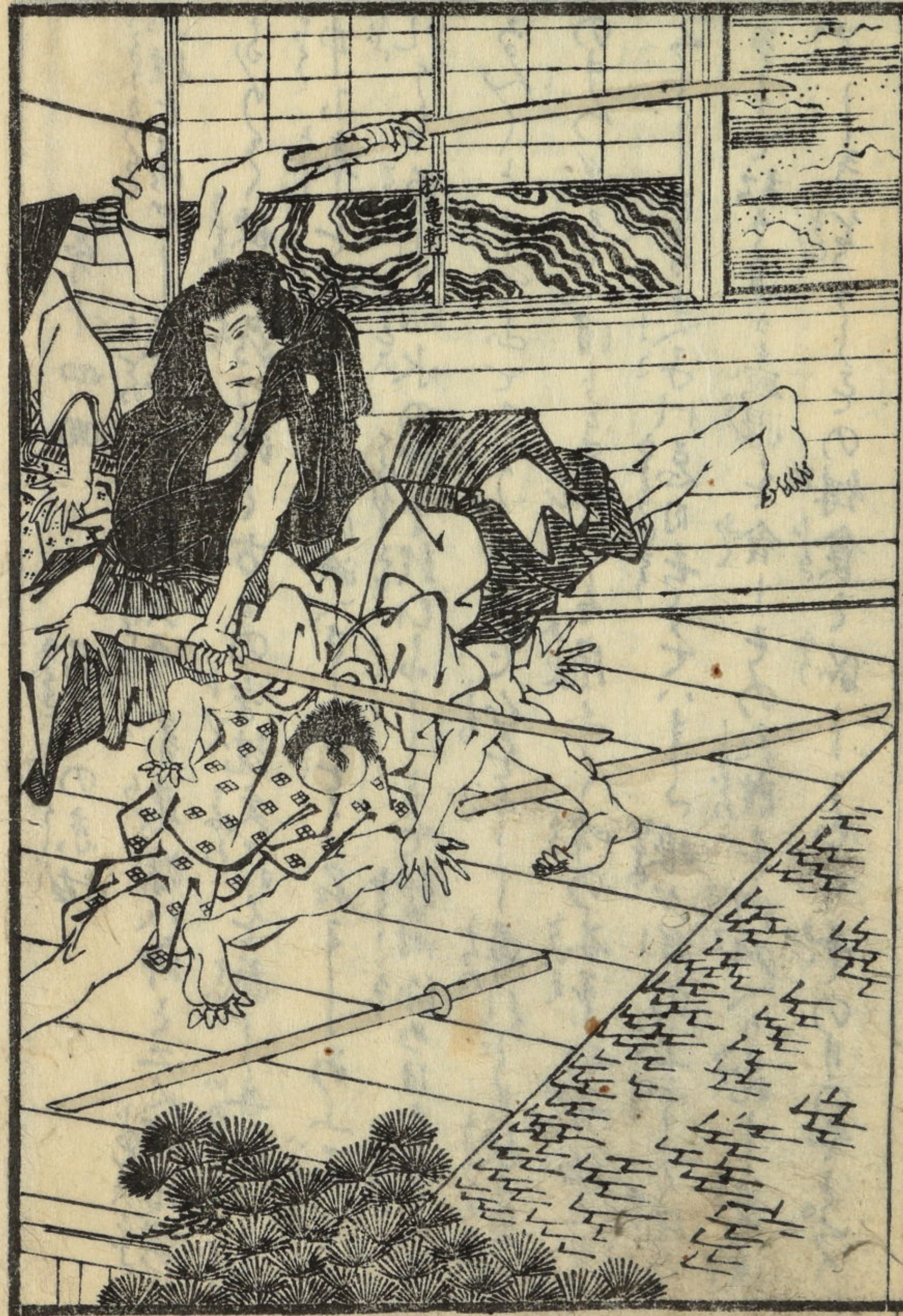
牙十四回

名草の末枯

此七為せし直井が後家呉中家東條八郎と二人順禮海を
 ありて款を召ね所し方々の寺院文房を指し舞歌し
 中ふ年を紙巻く近江へさしそり名も一あふ石山も
 札うち指し湖水の眺を頼いふしとて暫時祿め日も夕照し
 るんとししてふと下り。新まを心を尋れども款小粟津
 のまらふ不どけしと旅終を嵐ふく峰の本家の音信も
 なくし事り妻子け忌目去とていま娘が影の上さし編
 ありてねえ進が魚眼を食しその死骸を何処へか花し棄
 ぶしききさうしとの餌食とぬししや可也のりのやとら



丁比賣



丁比賣

言ておぼえたる様れ青小思ひ出して歎くは棟八郎御引て
 歎きおぼえたる様れ悔て返りぬ亡魂の速いのこゝとありて
 されば井と思ひ石止り玉いひ上り歎の行儀尋出とが肝要あり
 御小往來人のすんも申しければと練とて漸々と大津の
 所小を付足れば儼のき里塚のきより中しくと叫声すおぼ
 くと様の者けきとて叫をらるる道付ふいと御人ととる
 を大急しておぼれ様のりのるる途申して儼の病ひ及連り
 るれいとて様御小女の使りあさおぼれかけてとておぼえたる女
 の様人におぼえと有い候へし心細るるに女抱へ来りて
 と立来てくれれば御しりりぬ風俗の女なりしが持病ありて

癩病をけり目と入つら及みりて押抱用意の業と合し暫時
 ておし候り何玉のり方とや心まきとのさおぼれ御抱下られ
 おぼえたる好いおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれ
 の肉より赤網地お金の桐原草の房致しりる小柄入りとて是井お
 くも足おぼれおぼれ何玉の人とて何れおぼれおぼれおぼれおぼれ
 こそおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれ
 おぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれ
 石山寺のり利益おぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれ
 小柄をえて歎と宮におぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれ
 あれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれおぼれ

して女抱して子細づんと活あに若しる病の夢より立小柄
 のまゝ吾傷がらわもまのたれして尋求人としてけ程の艱苦持
 病も縁切く今歩形も足末ましく口惜く仕りそむ方さぬハ
 何玉のあ方ちも小柄のまゝ一鎌倉方の武士とて細柳の作範成
 して世とるせし小明友の爲ふ父とけ進故を存りりの上て名
 朝山東九郎と名し自帰が家伝品形上の里小徳義成し
 一夜ゆりの書とせし知妻ある者先祖の爲國して比良の長者也
 呼れを々小隠れあつり一才の靈流して御しと後世とるものと
 悔何幸して父の家と真一な心成あつり一知被浪士還而せ
 れてつるけ武術の師と教まれしうまき候家小逗留して永々

書い武術の秘法をいさされしふ元末文持悪友里人とに論ふと友々
 して人の爲ふよりしるぬるるもさくまも足限られしを
 恨くおまて殺害し逐去の形して自帰もその場して尚たれ
 る安西のいしと瘡と等しと若痛して及の程もさくどく比良
 してそ方さぬふ足限られしに惜を抱けりあつりけの母の女
 の使りるに母のの教くは察し下されしと聞ても小柄終る
 てけ終る。母はその朝山東九郎といひ傳りりともくと同玉強ゆ今川
 家乃浪人番系お進とておま伴お人の恨故あつりと存し次男と
 成りもあつり流りゆとば様八郎り大お務き扱は良の長者と
 あれは流のまは様三つとあまきや来る長者と悪友の伴様八郎と

いさりのるりとさきより婦人の言をたむしむるまは良型
 際三よてい兼て初あうそ家出せし是直有と及しが諸ふま乃
 兄よあり無媚や示や際三が富士にちりりのそひと不慮も
 中ふ名鍋呉咄も初ふ愛り家来の隙八郎が身嫁めとわりのいきや
 何よりよは悪愛大病途中とつ夜又その難儀何れぬとわ
 信ふやとてをておて宿とて舉へ来て女抱し隙八郎古脚
 のるより霊蔭の始末并系忌まで奪ひえれらるよりつてあし
 摺して悔と折角ををを國とておて切辛苦して先祖の家名を
 再無せんと思ひしるる水の流るるの不幸に流浪の牙とありし
 も古脚お便り中屋遠まふ一夜に武士の交りせんと遠く着めの申

婆もあくた々の家へ送し上牙と此業お先立大切系忌ををい
 いしり〜天運おそるる侍る〜の牙の果やと恨つまげら
 り解るがけ上六は主人の歌牙の仇尋出せを並らさやと春と握り
 怒憤し我も呉咄も同埋おせぬりとふかくお辱命あるおれくも後ま
 ぶ〜も神仏の加護あれごとそけりて不測も 飲の指子ニツとそ
 此身が兄弟家の衣形つらるるの難さよ初あろう〜お松を進上
 方〜して頼しおお遠お〜富士にとの病丸全使せむともくお
 かと如て故と尋ね千人と種く女抱おせし〜らごらぬ版を
 栗津のね吹風お誘れ秀の命の消うせざる隙八郎が疑いお
 呉咄も余はる〜は同一〜歎きお涙〜〜が如て果とと隙八郎を

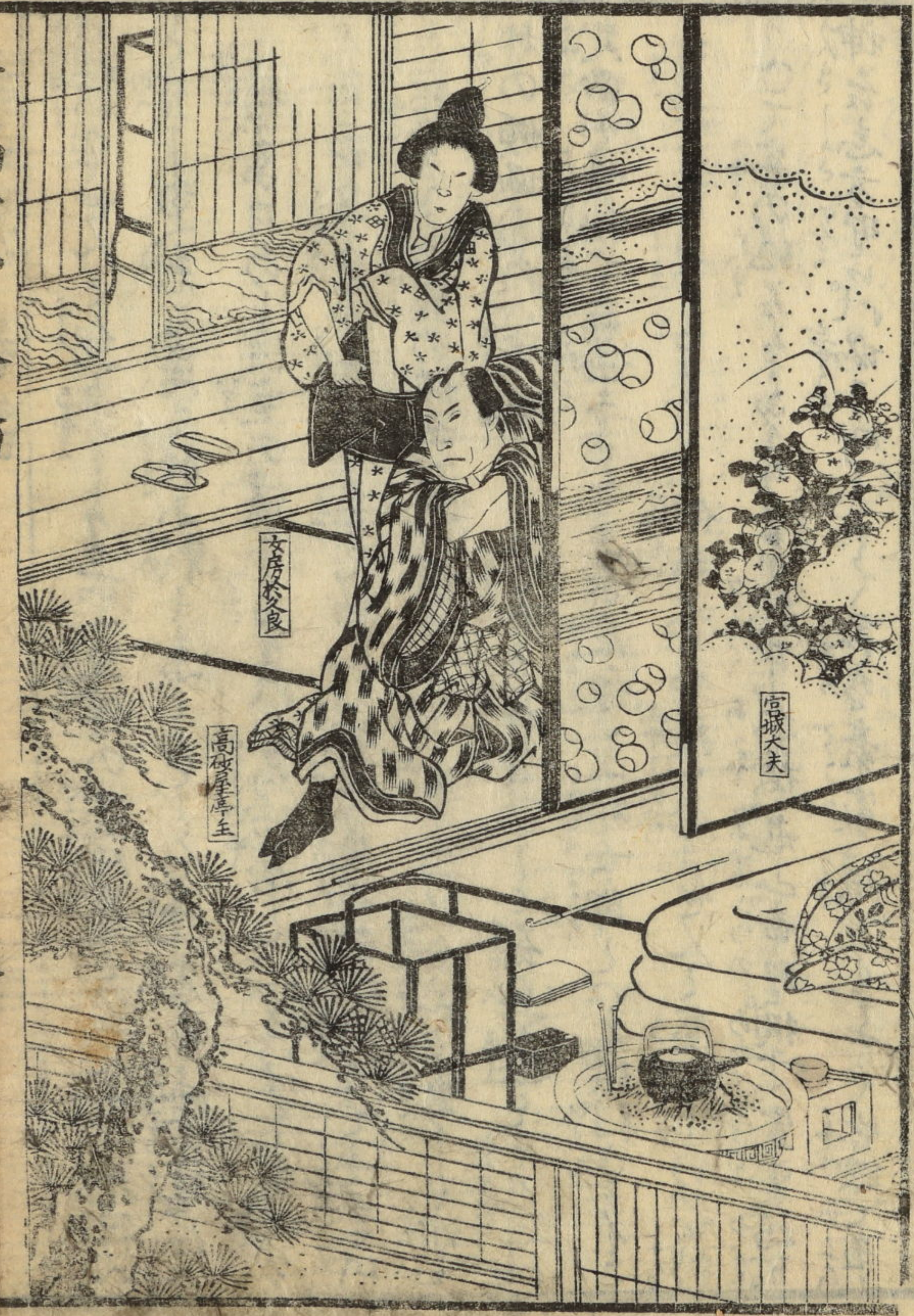
とげまゝののち一葉送つとふりてそくおろへる立寄らばよめさし
て登りつは

牙十五回

白梅の再開

備まらば五葉坂の傾城今小町と異名して洛中洛外の好人等と
ふく不通とふく夜と争ひ日を争ひの楊梅して口説といども
誰もて小町が常の鏡前とわささるといふものふく被る石女よ
実お官ふしとたれいふ不具必だし己が不具と後人としてかき
吳風ふ鏡前下して人と親を狐狸といふとき人高に塔あり亭主
も彼と一致して抱し一りのあふ人向後被家ふゆて持ふこと勿き
嫌ひて悔人より唯初ざらぬゆふと誰いふとさく新吟志る

由い毎こ小ま淋さしうなりし亭主も大不迷惑し邪る悪役ありて
世と後世のつれづれ何方へも仕替にきとぞし女も女として
金儲せしむるれは世後何程とも若しうびとて休んを何程
花津のまゝ忘八仲間中もれは播磨宮内少将所の女郎屋高
砂屋院業といふ所の浪花津にて仕事とせきき上りて被小町
と抱とたしおそくお後調い大金とぞし世橋連れぬりたる麻酔
悪人小探と主人とておとほさげ初しが都る家の幸とあり多のれ
責重とほし多し程の廓の娘の孫坊ふて廊中のそぞ敷日急
おかりしが悪役せられしより一日も客と違がりしう大ふ心配
しそよと亭主と孫と集れどくあり去とて今さく乳とほさる



に構いしとせんと心と考一なる所室津の高砂屋とふ人未だ抱せんと有し由一免れ角も能く不頼と多しとて喚聲や連立橋切と執多ふ日あぐび室の津小若多れい高砂屋といはるはす一ふ場も大家にて喚聲が戻ると家内跡にぐ出逢一是彼挨拶強くて喚聲は度部より今盛の傾城と抱束るより一云々の伏合ぬと委しく話し都の傾城あれが中略しく宮城と名付べしと右目と撰と高砂屋は又城と呼初て廓出まてりう家たさぶ都女郎といえは引ひきまふ兼てより喚聲より一似成又りや寝とめさせんと突出一の目と柱うひて密の絶るをありう家枕中。赤穂巻山童野綱子。完栗福中。神台志方野に代城下町とてまゝ名を豪華家限りもふく宮城と争

殺てそし入来る中ふ二本の城下を屋町の鳥目利橋二といふ家のい廓ふ堂の會ありとてを屋仲間不誘引れて室津小来り皆と連立高砂屋不控の席上ふ交味と振るは舞と催し何れも強引してはや小泊り皆く交味と買んと争ふ仲居もりてあゆみ大勢の喧嘩うひとりの交味を交何方とも定めがごまきば上は法客の形打と集あたまをの好ふをせその形打のま極へたまふと揚玉といふ皆くこれと面白き執向ありとて形打をせり形打と出しをまがまふふ交味つれこの形打と争んと喚聲と飲で相ぶ良あてたまふ目利のまゝいさふりといふとこれに橋二形とあり皆く真とぬし初より先きまるといふいれど今又振えりまホいれり縁して夜とめばやるといふ

小橋二之助感已が園房へと引れておぬ橋二も独り園中にお友まらうと
 森中へは現くとしてある森をへ滝子地へ家つて入来り宮本さま
 あり橋二記ある鶴鳴きでもとけはる甲斐ありてお膳房へ
 君の手む新おのくくとえんかされるけぬとにはおすのしかるごと
 とやえり今お悦の云ふお本へお筆一つ引お救多の御方おん
 お君偏かできしおびるおす一おねごのまお高り取れては
 お憂思一おまんそと縁一としておす一おせむ一と橋二が
 鳥てはくくとお泳め君この玉の五人を後らせむすかと穴
 橋二否まおれよりお承玉の産あり子細おては橋二お托客の
 のよるが何由お托おれ玉お本おすよりお梅こそお君偏か推すお邊

へ東國と云ふは後河の玉としてお本氏とやらお方とてお尋りしうと
 れ橋二びつらうとしておつともそのお尋後府とてお本貞造とつおの
 ありが何れお承お名と知りおすや不審お身お系都より来りしと
 お一かおえよりお都も還向せしうどもお時人のお音お出いもより
 子細おおるしお詳お承せむしといはるお本二おの意もあくお破
 としてお徳の揃とて一頃更款お雁お承お王姫君お右卿と慕いお
 おとていどもお噴巻お青草とせしとて宣ふらうお那女のお念お麻
 おの男お操とてお女と共お小祝とていども三年お承他人のた
 おとてお流るお心お後下してお夜も情と賣らるお使の
 出るお承一の勅とてお鳥お月お花お君とてお情と高しお街とて

情と不測と妻として無人の室貸と命を罪にダケしと業と毎々
 かく思ひ人の非の悪人尋常なる優曇華の如き都をこの中
 小拘ふせぬりて洞の止めるの良ありて身とりのげ鼻打て
 故る来歴を知るとまの不審むしむ理り元香備は駿州府中
 父今川家の朝は系傳中ち家来直井氏の娘麻理とせし
 ありしが幼くの比牙して國と退き今此郡小松女とぬりて
 剛ての松子美濃の娘難より忠六を悪計して京都賣られし
 まで故る落もあしくお供されは橋二元その貞潔と感心し
 此女貞女うねる凡まられはる貞潔と濁し申する美新も
 下より一とくは情をれお救りぬ此女は後小思ひ玉るこそ

ありけしと此女の若果て物を出し國元へ送り給ふと
 駿州小松の頃文字より御書されし来船の小松と申し
 かく國をへ何卒同様の小松と申し出する買取り取
 と諸国好事の教小入込も同利と称し小松の若果て分御
 端師菊して密ふカナリヤの新橋とぬね茶頃より當玉三本の城
 主、此を外を城をへむと一むらび別城下鳥屋町も道田とし
 日は増く小松命権しを園隣村より異教天祐のをも集るとい
 るいまむカナリヤのどれをどいぶ心配中今日此室澤上堂
 ありとて根拠をられぬし一知不覺の妙り拵ひ此女小松と申
 するの祭祀松進が縁計ありし知ふとされけし上もこのあり

尋米の降糸くくしてあふが若果と購出ー於て目か度来と近ノ也
 是被結一いしと事一しと境の勢力ふす一連の人々樹々一叫くと
 して喚ひまれば又こそまんと物一けけらうら付きて出たれ本
 心堂障のりのけの座ふ志持ととあーくと思ひも一世不懸きふ
 牙う都二とと三とを心と細一ひるなり一息人と思ふおほむ初のみ
 信よりさふるに別れ何付をこもまぬ火のあうと梅のかりい出
 と細くと書徳の三本の城下一杉いまる花柳の恋のを荷より一木を平
 と海りのいとおもひぬ備後の度よりて今さうふ音の物とてめ
 ざりーほき中ととめぬる。橋二松雲のおもれども被これと道
 て空がざりく通さるおなまうー一也何いふく人お指さる物も

若果といふさうく新造ふ世もあき橋二が放蕩余くけるさうりと今
 心切りい者もるくゆふ水の交りーく。橋二も此松子初といと
 も明府て人お話さるさうもわくび取捨のるを都ふありてをさ
 とるるあさだくび何年橋泉の野花い出く小をの初清さる出
 だーと。思どもいやくーに空城が情も持がくー。此程はわくさる
 が身夜宮城ふかしの以牙とね後たれば空城さく君その心さるあよ
 偏とねく廊と立退きさるの初清さる尋むられー自兼さうり
 真を吹葉さるのおの上のる明府お頼むられ何付さる跡をさで
 と情ほさ使まわる事さるふれ君の牙の上自がさるあるさまで恋
 頼むさうりと芝景ありく物さるれハ橋二大おさうさびたある上



女も人々を貪りて世とて人々を人々とする事を知りて不謂慮進
 福所の教いふくどや我足衆と連なる由事とてけてる人ともれ
 却ら慕り雅務を初より終る誠徒とて知ればそ人も生て志進
 きふ怒言衆と費し不足と多りし由里人々を病むは女もがま名
 きで赤くくき初り浪舞ふ或る官不若礼明をなく使再とてふ
 まる身誠徒の船中不誘引求めどして之傳ふ衆も夫より授ちまふ
 小して我も不誠徒を判し玉ふふまは女も執念して首取との下と
 横登して後打ちかたより上れば赤ふする事と知らるるものども
 大少勢も客人あまう玉ふ或る英雄とも知れどして今期より不
 振舞せし後平次一玉う一金く我もが妻おつて首取の免

女も人々を貪りて世とて人々を人々とする事を知りて不謂慮進
 福所の教いふくどや我足衆と連なる由事とてけてる人ともれ
 却ら慕り雅務を初より終る誠徒とて知ればそ人も生て志進
 きふ怒言衆と費し不足と多りし由里人々を病むは女もがま名
 きで赤くくき初り浪舞ふ或る官不若礼明をなく使再とてふ
 まる身誠徒の船中不誘引求めどして之傳ふ衆も夫より授ちまふ
 小して我も不誠徒を判し玉ふふまは女も執念して首取との下と
 横登して後打ちかたより上れば赤ふする事と知らるるものども
 大少勢も客人あまう玉ふ或る英雄とも知れどして今期より不
 振舞せし後平次一玉う一金く我もが妻おつて首取の免

十出遊 卷之四

十九

一、高島屋より一紙平とて向後附合共一と皆く構二と云ふは
とて中大切小豊彦一十分の退風とて翌日大海の津ふ着岸せ
一、高島屋より紙の書と持て谷川吹流とて小者のまゝぬれり
結々外伝切小登彦幸ひ是より巽小代といふ村にて呪害の書字
教る人の一紙一と兼く鳴る被紗小取玉一紙よき小推彦中一
一と史跡と連く不代村小取玉村長一もの一異々る由とて
此書又小登彦原

晝小説打出之巻卷之四終



たか中一紙若多利が智恵
おいめうれ見ると目丸
まご再てかきこ
そろりしきせりかき
曾呂利歌

繪全部五冊

大湖赤吉の清曾呂利が清剛持歴して
名不取れり一詠る程奇能持ありといふ九貫之
室家小所をこめむらりて人子下人を奉げて此
事小より一紙を詠一又出被が電で事と云し
波奇の女を鬼といふ説の風が奇よき事なる
何小し一紙面白事を書あふ一奇能持乃
好者不限とて皆いとくの讀く大益なる書なり

川島信清画

商人軍記

一名出世早合点
全部五冊

一、商人分利なる故りて中て家為て其の好の
道より換多して其業の妨とあり。或は其の好し乃
其者難難辛甚く分限者となり先組の家名を述
不幸が事といふは倭倭とあり。難儀が却て春様とある
の類三杯のもふ事とて述べると見る人の心へ教訓と
ありや。其の事大福長者とあり。其の事大福
一、商人の事とて其の事とて其の事とて其の事とて

